

あせりは「百害あって一利なし」

この手紙に対する返事は、そのコピーがありませんので、はっきりしたことはわかりませんが、各項ごとに書いた内容のおよそは思い出すことができます。けれども、それはさて置いて今、この原稿を書きながら思いますことは、『障害児教育は、むずかしいと思う以上にむずかしいものだなあ』という歎きに似た思いです。

能力が低いものですから、練習させること自体が大変な上に、同じ練習をしても、普通児に比べ、その効果が歯がゆくなるほど遅く、情けないほど小さいので、親としては、あせってはいけなしいと思いつつも、ついあせってしまうのだと思います。

愛子ちゃんのお父さんには、『あせることは百害あって一利もない。決してあせらないように』と度々忠告しており、お父さんもそのことはよく了解しているはずで

それなのに、いつの手紙でも、普通児と比較しては、その進歩の遅いということを歎いています。それは親として、まことに無理もないことだと思います。しかし、親は、絶対に歎いてはならないのです。

子供の進歩の遅く小さいのを、親が不満に思い、歎いていますと、子供にそれが必ず伝わります。以心伝心と言いますか、親の歎き子供にわかるのです。そうすると、子供の心も必ず沈み、活動力が衰え、意欲が薄れますので、進歩はいよいよ遅くなります。

それで、ドーマン博士は次のように教えています。

鉄棒に一秒間とぶら下がることのできない障害児がいたとしましょう。この子供が、訓練のために鉄棒にぶら下がることになりました。彼は歯をくいしばってがんばりましたが、わずか一秒しか耐えられませんでした。

さて、この子供に対して、二通りの評価の仕方が考えられます。その一つは、『たった一秒間しかぶら下がっていられなかったの。だめねえ。今度はもっとがんばるのよ』という言い方です。

他の一つは、『まあ、一秒間もぶら下がっていられたの、えらいわねえ。あなたのような身体で、一秒間も鉄棒にぶら下がってられる子供が他にいるなんて、とても考えることができないわ』という言い方です。